

無量壽

平成23年8月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語⑬

本願寺第五代の綽如上人は、本願寺のある京都と、布教活動の拠点として自らが建立した瑞泉寺のある越中をたびたび往復しておられました。その旅の途中で病に倒れ四十四歳の若さで亡くなりました。亡くなられた場所がどこか、その墓がどこに建てられたのかなどは正確にはわかっていません。

前号にも書いた通り、綽如上人は高い学問を身につけたお方でした。瑞泉寺を建立するに当たり上人が書いた「勸進状」が瑞泉寺に残され、国の重要文化財に指定されています。これについて文化勲章受賞者でもある作家の丹羽文雄は、その著書に「名文、達筆の勸進状」と表現しています。このような上人が早くに病死されたことは、本願寺にとって大きな

痛手だったと言わねばなりません。

綽如上人が亡くなられたとき、その後を継いだ本願寺第六代の巧如上人は十八歳の若さでした。ですからすぐに越中に下って布教活動を継続することはできず、しばらく瑞泉寺は無住のまま放置され、衰退せざるを得ませんでした。この頃の本願寺は建物ものが小さいうえに参拝に訪れる人も少なく、寂しい状況であったと言います。本堂である阿弥陀堂は三間四面、御影堂は五間四面であったと言われています。林徳寺の本堂が七間四面ですから、いかに小さな建物であったかがわかります。



金閣寺

この頃は足利幕府三代目の足利義満が全盛を迎え、京都の北山に北山第きたやまてい(現在の金閣寺)を建立して、明と

の貿易を進めるなど大きな力を発揮していました。

また浄土真宗ではこの頃、仏光寺ぶつこうじが隆盛を誇っていました。京都の東山渋谷しほりたに(現在の京都国立博物館の辺り)にあり、毎日参詣人が群集していたと言います。名帳や絵



現在の仏光寺

系図を用いた布教が広く受け入れられていたためです。

巧如上人は後に弟の頓円師とんえん、周覚師しゅうかくを越前に派遣して新たな布教の拠点を開かれ、瑞泉

寺の住職には第四子の如乗師にょじょうを就任させました。これらの布石が後に本願寺に大きな力となるのです。特に、八代目の蓮如上人にとつて三歳年上の叔父である如乗師は、後に大変な働きをすることになります。

続く

(五代目) 綽如
(六代目) 巧如
(七代目) 存如
(八代目) 蓮如

宗祖 親鸞聖人750回大遠忌 団体参拝の報告

平成23年6月8日～11日の日程で、新潟教区新潟組で、標記の団体参拝を実施しました。八ヶ寺から78名が参加し、観光バス2台での旅行でした。その様子を、写真を交えて報告します。

①6月8日

林徳寺看板前6：45発 → 新潟駅南口7：20発 → 各地見学の後、湯の花温泉 泊

※残念ながら住職は、お葬式が重なったためこの日は参加できませんでした。

6月8日の夜行列車で京都に向かい、9日の本山参拝で合流しました。

②6月9日

ホテル発 → 東寺・見学 → 本山・750回大遠忌法要参拝 → 鴨川納涼床で宴会 → 東急ホテル 泊
本山の御影堂は、50年に1回の大遠忌のみに用いられる荘厳（飾り方）で、厳肅な雰囲気の中での法要でした。幸い、大阪の企業で社会勉強中の当院も参拝でき、良いご縁となりました。



本山御影堂の荘厳



参拝席（当院も参拝しました）



納涼床

③6月10日

ホテル発 → 大谷本廟・参拝 → 信楽たぬき村・見学 → 長良川 ホテル十八楼 泊

大谷本廟では、普談は入れない明著堂の中にも入れていただき、親鸞聖人の墓所（祖壇）を正面から拝観することができました。住職にとっても初めての体験でした。



普談は入れない「明著堂」を拝観



たぬき村の「大だぬき」



ホテルから岐阜城を望む

④6月11日

ホテル発 → 高山市・見学 → 白川郷・見学 → 新潟駅 着 → 林徳寺看板前 着

日本語になった仏教の言葉 ⑱
檀那

サンスクリット語の「ダーナ」の音訳。元々は施し・布施を意味するが、日本では、寺院や僧侶に布施・寄進をするパトロンの意味で用いられた。

檀家は「檀那の家」を言う。一方、布施を受ける寺のことは「檀那寺」とよばれ、檀家はその寺で死後の菩提を弔ってもらうことになるので「菩提寺」ともよばれる。

この「檀那」は、家を支えるパトロンとか、恩恵を与えてくれるものの意味から、夫や主筋の相手に対する一種の敬称とも転じ、「旦那」とも書かれるようになった。

東日本大震災関連でよく報道された「義援金は、本来「義捐金」と書く。布施のことを「喜捨」ともいうように、捐の文字も捨てるという意味。

自らの利害を捨てて、私財をなげうつ覚悟で人道や公共のために尽くすことが布施であり、喜捨、義捐に当たると言うことなのだろうが、なかなかその境地には達せないことを、今回の災害において気付かされた。

お恥ずかしい限りである。

『岩波仏教辞典』などより